

提案書概要版
(契約候補者以外の提案者※)

※順不同（４者分）

未来の価値を生み出す場づくりとなる「まちと共にある」庁舎

これからの庁舎は、未来の価値を生み出す場としての役割の視点で捉え直すことが重要であると考えています。

“くまもと”というまちの未来を考え、みなさまと対話することで、その価値を発見し、そして、それを共有できる環境の整備こそが、私たちが目指す「まちと共にある」あたらしい庁舎の姿です。

未来の価値を生み出す“みらいのひろば”となる新庁舎

- ・DX時代を迎え、市役所の役割が行政サービスから相談・協働へとそのカタチが大きく変わろうとしています。市民一人ひとりが、まちに関心を寄せ、まちづくりという行政の大きな課題に大きく関わりを持てるような、受け皿となることが「まちと共にある庁舎」に求められていると考えています。
- ・新庁舎はそんな市民の集まる「みらいのひろば」となる庁舎とし、「みらいのひろば」は、まちの未来を生み出す市民活動の場と位置付けます。みんなの想いがまちの種となり、いずれ芽を出し、収穫するという、市民にとっての「まちづくりの畑」のような場と考えました。
- ・「出会いと発見」⇔「魅力の再発見」⇔「改善と提案」という好循環が生まれる場こそが、真に求められているあたらしい庁舎だと考え、ここに提案します。



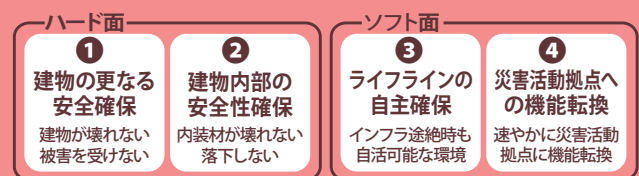
「いつも」と「もしも」に活躍する フェーズフリーな庁舎

地震や水害に対する確実な安全性確保のもと、災害時の機能維持と共に、災害時を想定した機能転換や機能拡張が可能な計画とすることが大変重要なポイントです。

この花畑広場にひらかれた市民の日常の居場所となるこの市役所は、災害後は一時的な災害対応に留まらず、長期にわたる復旧活動を継続する必要があります。

災害活動拠点庁舎に必要な4つの BCP 要素

建物のハード面では熊本地域の特性を踏まえた安全性を確保し、ソフト面ではインフラ確保のもと、災害活動拠点へと速やかに機能転換や機能拡張が対応可能な計画とします。



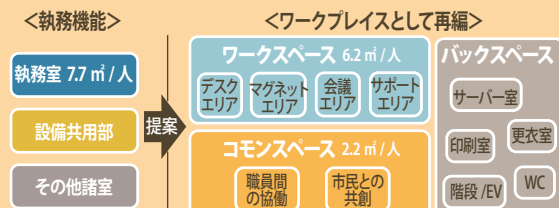
時代の変化と共に歩めるフラットな ワークプレイスとなる庁舎

変化・更新が続けられる持続可能な、すべての場所がフラットなワークプレイスとなる庁舎を提案します。

DX化を見据えた業務のスマート化に対応できる柔軟性・拡張性・
冗長性を兼ね備えると共に、職員や市民との協働・交流を育む
協働交流型のワークプレイスです。

協働交流型のワークプレイス実現のために

要綱の執務機能の役割を分析し、ワークプレイスへと分類し再編します。多様な働き方や将来の変容に答えと共に、協働・交流と知的生産性を高めたワークプレイスを実現します。

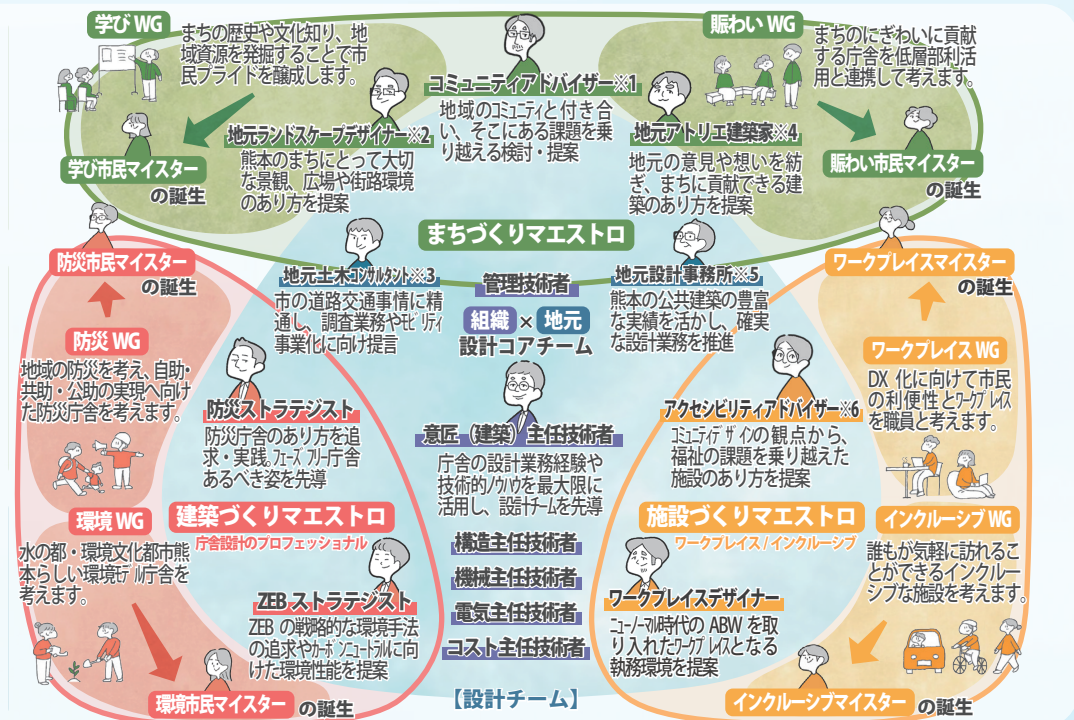


未来の価値を生み出す場をつくる、 「共創」のフォーメーションと 設計プロセス

本プロジェクトには、様々な人たちが参加・協力する共創社会にふさわしい、新しい設計体制や設計手法が必要と考えています。

それはひとりの建築家の個性や大手組織事務所の技術的な知見によるものでもありません。

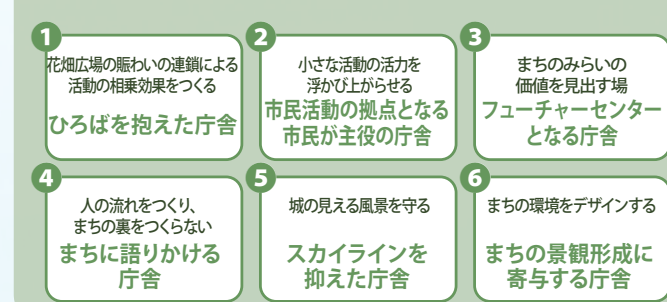
「まちと共にある」庁舎を実現するために、まちへの想いや心象風景、地域の感性をカタチにする、「共創」のフォーメーションと設計プロセスを提案します。



熊本市の未来へつなぐ、市民が主役となりまちの賑わいの風景に参加する「まちと共にある」庁舎

まちの賑わい拠点である花畑広場とつながって、市民が日常的に集まる姿がまちの魅力的な風景として浮かびあがる姿を目指します。そして水と緑のまち熊本に対する市民の心象的な景観を大切にしながら、人の流れや街路の景観形成に寄与すると共に、まちの賑わいの風景として参加できる「まちと共にある」庁舎のあり方を提案します。

まちと共にある庁舎のために必要なコンセプト

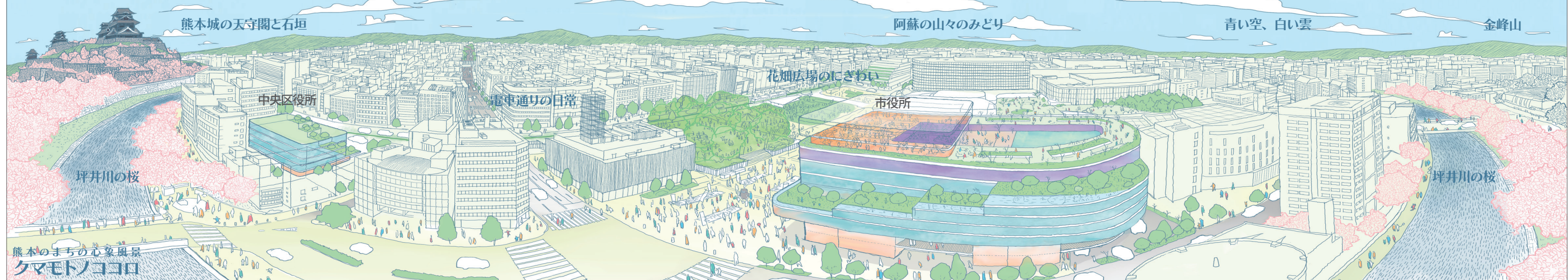
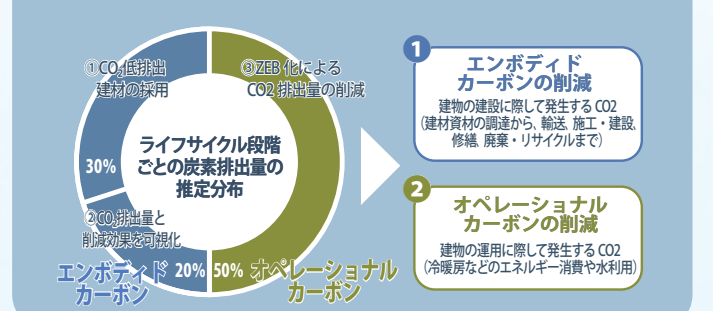


これからの時代を牽引する環境共生型の庁舎 実現に向けたコストマネジメント手法

いま私たちに求められているのは、建築ハード面の削減ではなく「建築手法の適正化」と考えています。

コスト抑制の概念を見直し、カーボンニュートラルの視点からコストマネジメントを行います。建築の経済合理性や機能性のもと、くまもの自然や建築空間を活かし「建築と技術が融合」した、ライフサイクルコストを最小化する環境共生型庁舎を実現します。

カーボンニュートラルな視点からのコストマネジメント



新庁舎の在り方「くまもと 2050 のマチづくり」(賑わい・防災・エコロジー)の起爆剤となり、「ユニバーサルな市民サービス」を実現する新庁舎

マスターコンセプト（基本的戦略）：「城下町都市・山水都市 くまもと」の基盤を生かして「ヒトが繋がり、マチが繋がる」起爆剤となる新庁舎

基本的な考え方：マチづくりと新庁舎「規模から質への転換」

① マチの課題と新庁舎：熊本市の都心部は中長期的課題として①人口減少とそれに伴う活力低下や土地利用の空洞化、②都市機能の更新等の課題を抱えており、更に③気候変動や④頻発する災害への対応も求められています。この様な課題解決を先導する場として新庁舎を位置づけます。

2 マチの方向性と新庁舎：私たちは人口減時代の都市機能更新に向けて、将来のマチを「規模から質」への転換を図る「くまもと2050」として構想します。2050年の職・住・遊のデジタル化が一層進んだ社会のマチづくりではリアルな価値が再評価されと考えられ、その価値とはヒトとの出会いやヒトを惹きつける活動、社会的弱者の活躍も含めて「知縁的活動」の舞台となるマチの空間や自然との繋がります。私たちは縮小の時代に賑わいを生み出す価値の創造と防災性・エコロジーが高まるマチづくりを推進しながら、マチを構成する建築のモデルとしての新庁舎を提案します。

新たな都市基盤「余白・アーバンループ・トオリ」と新庁舎

様々な繋がりを生むヒトの出会いや活動、更には防災やエコロジーのためには機能を限定しない「余白」となる空間が重要と考えます。その様な新庁舎やマチの「余白」が連鎖することで新たにマチが繋がり、ヒトが繋がり、自助・共助・公助の基盤が形成されると考えます。私たちは、この「余白」を繋ぎ合わせ、現在の賑わいの基盤「2核3モール」をループ状に拡張する仕組み「アーバンループ×トオリ」形成の起爆剤となる新庁舎を提案します。

①「余白」	アーバングループとトオリに沿って、新たなまちづくりガイドライン(案)により公開空地を設置を誘導。今後増えると考えられる空地は広場、緑地等に再編し、楽しく時間を過ごすことができる滞在型のまちづくりを提案します。
②「アーバン・ループ」	本庁舎、中央区役所、現庁舎敷地の3つの計画が日本郵政やホテルへ、坪井川を挟んだJT-NHK跡地等へと波及し、3エールへ花畑広場へとループ状に繋がるウォーカブルな都市基盤の形成を提案します。
③「トオリ」	アーバンループを横断する既存の「通り」を活かして、選択的にまち歩きができる街区レベルの回遊ループの形成を提案します。

表 1_ 余白・アーバンループ・トオリ



図 2_ 賑わいまちづくりと自然景観・歴史景観との呼応

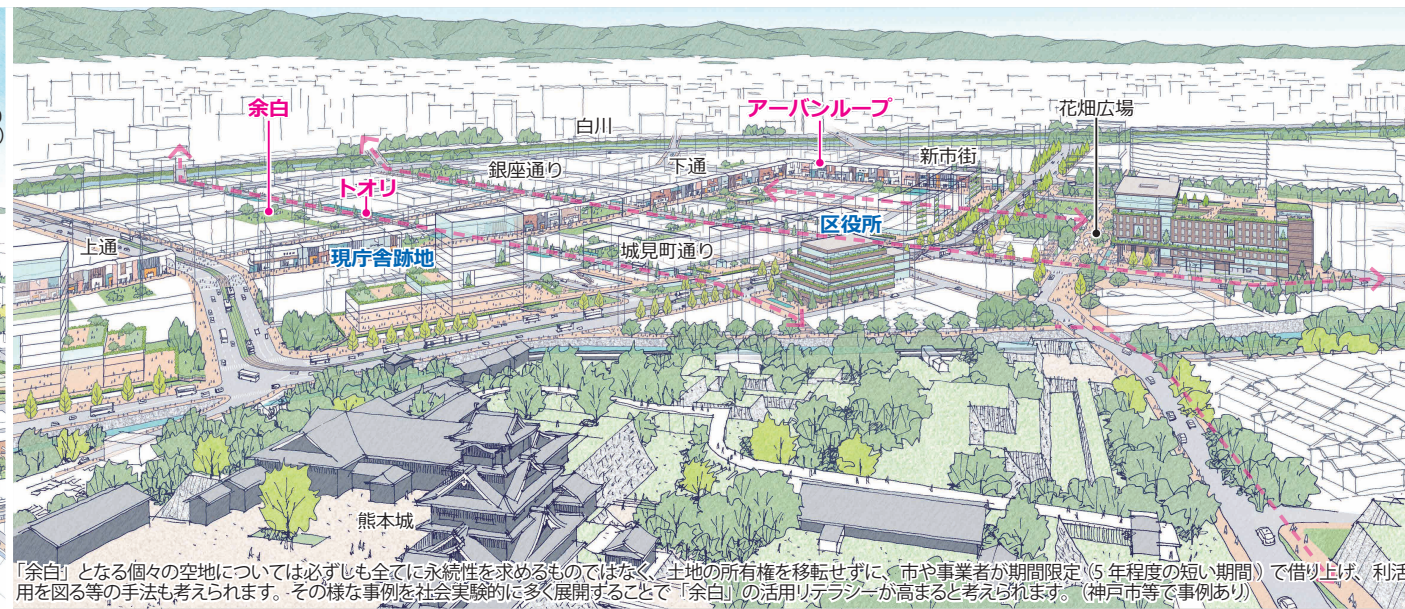


図3_マチの「余白」を繋ぐ「アーバンループ×トオリ」ーその起点となる新庁舎

コンセプト 1.「山水都市くまもと」ならではの新庁舎

①マチの回遊性向上の起点となる：立地のポテンシャルを活かし、回遊性向上の起点となる新庁舎を目指します。そのために人々の動きを受け止め、活動が交差する新庁舎とします。

②歴史性と自然との関係を未来へ繋ぐ：藩政期から現代に至る町割りや街並みと呼応し、「熊本スピリッツ（簡易・善良・素朴）」（小泉八雲）を体現する庁舎づくりを目指します。また、山水都市の特性を踏まえて都市生活と自然の関係を再考し、エコロジカルなまちづくりをリードする新庁舎とします。

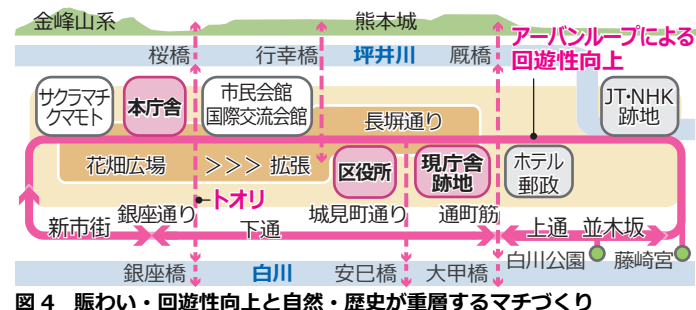


図 4_賑わい・回遊性向上と自然・歴史が重層するまちづくり

コンセプト 2.「防災まちづくり」の拠点となる新庁舎

①災害の教訓を活かす・継承する：熊本の大規模災害のデータや教訓等を入念にリサーチし、実効性の高い計画を行います。また、アーカイブ展示スペース等により熊本地震や白川水害を伝える地域拠点とします。

② 日常の延長にある防災まちづくり：災害時に「アーバンループ」と「トオリ」は避難路・緊急車両のアクセス路となり、「余白」は一時避難受入れ等の共助の場へと役割を変えます。新庁舎は、余白を内包する計画とする事で防災まちづくりの拠点とします。

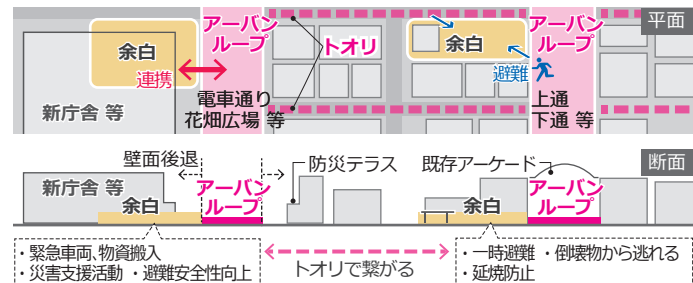


図 5_ 地域防災に資するアーバンループ・トオリ・余白の考え方

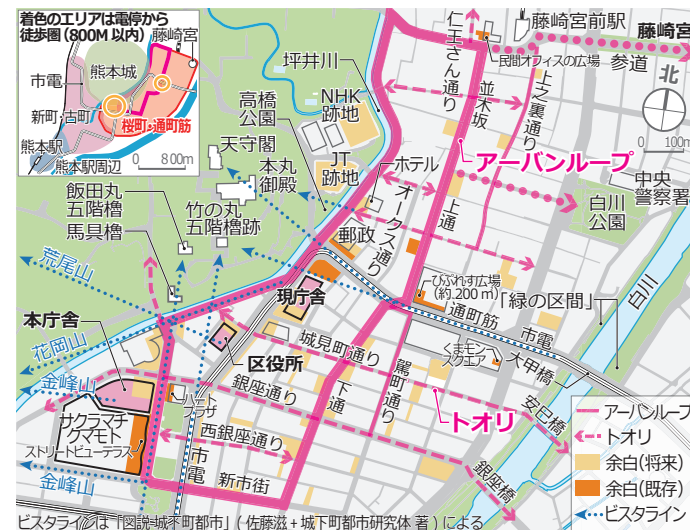


図 1_点から線、線から面へと展開するマチづくり

コンセプト 3. ユニバーサル市民サービスを提供する新庁舎

①いつでもどこでも行政サービス：COVID-19は「庁舎に行けない＝行政サービスを受けられない」ことを顕在化させました。新庁舎では、諸手続きや相談のオンラインサービスに対応する施設計画と、対面によるサービスのための空間づくり双方の充実を図ります。

②公・民・学の共創によるユニバーサル市民サービス：新庁舎
を市民主体でまちづくりを行う共創の場と捉えます。公・民・学の共創を喚起する「余白」となる空間を充実させ、従来の行政サービスをこえた市民サービスを提供できる新庁舎とします。

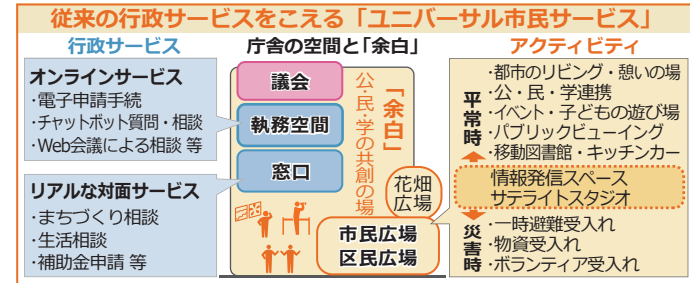


図 6_ 庁舎の空間と行政サービスをこえる市民サービスの考え方

マチとの繋がりを生む交流の拠点

①オープンスペースの連鎖を生む2つの広場：本庁舎の敷地は熊本城から花畑広場へ、区役所の敷地は城見町通り・電車通りから長堀通りへと、オープンスペースの繋がりを生み出す力を秘めています。その力を引き出すため、両者共に角地に広場をつくり、行政・市民・マチの交流の起点とし、その連鎖を引き出します。

②市民に求められる「マチの機能」を充足する：中心市街地のマチの機能を分析し、庁舎に付帯する機能や市民スペース、広場の在り方を検討します。市民が潜在的に必要なとしている場所、マチの魅力向上・共創のために必要な機能を対話のうえ定めます。

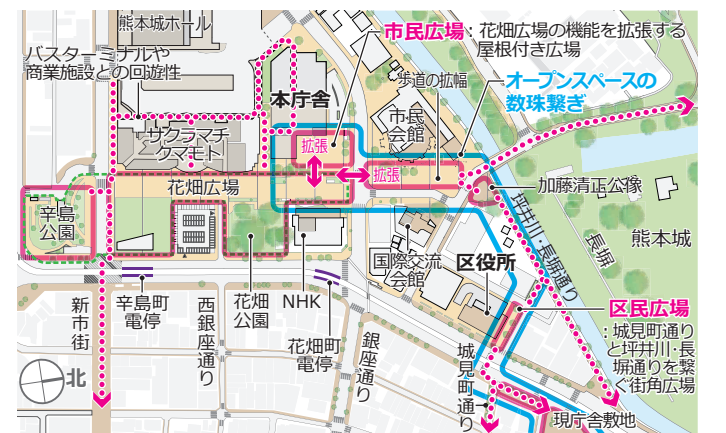


図 7_回遊性を生み出すオープンスペースの連鎖

Figure 1: Comparison of the two plans. The left plan shows the 'Citizens' Plaza' (市民広場) and 'Citizens' Space' (市民スペース) with a 'Staircase Garden' (ステップガーデン) and a '10m setback' (壁面後退 10m). The right plan shows the 'District Office' (区役所) and 'District Plaza' (区民広場) with a 'Terrace' (テラス) and a 'Setback' (セッバック) for '眺望と空の広がり' (view and openness).

図 8_ 市民広場のイメージ

図9_区民広場のイメージ

市民に開かれた合意形成プロセス

①「理解度を深める」市民ワークショップ（WS）の開催：WSは現庁舎が抱える課題への理解を深めてもらうことから始め、新庁舎の在り方に対する共通認識の形成をゴールとします。

WS	1 回目（WS1）	2 回目（WS2）
テーマ	・ 現庁舎の課題整理 ・ 新庁舎での解決策に関する検討	・ WS1の意見に対する考え方の整理 ・ WS1で関心が高いと思われる項目（市民スペース・窓口・利便施設等）に関する検討
ワーク	・ 現庁舎見学会、ダイアグラム1の提示 ・ 現庁舎の課題と解決策のプレスト	・ WS1を踏まえたダイアグラム2の提示、事例紹介 ・ テーマ別にグループ分けしてプレスト

表 2_ 基本計画における WS の内容 (案)

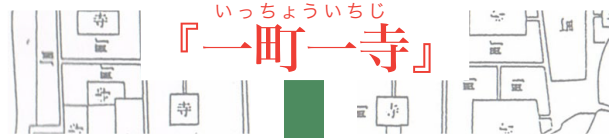
②「市民参加の幅」を広げる：基本計画では、WSに参加できなかった方を対象にWSを補完する意見交換会を行います。様々な観点のニーズを拾い上げるために、WSと異なる属性別のグループ（障がい者、子育て世代、災害ボランティア、地域団体等）を対象とし、各コンセプトについて意見交換を行います。

(1) 熊本市が目指すべき新庁舎の在り方に関する“コンセプト”とその考え方

目指すべき新庁舎の在り方とコンセプト

熊本を守った加藤清正公のまちづくり

清正公が布陣した江戸時代の熊本の防衛システム『一町一寺』は、敵人から攻めの備え場として町割りの中央部分に寺院を設け、平時では町民の憩いの場、有事の際は兵営地として活用し高い防衛機能を保ち、人々の暮らしを守った。



『まちの大広間』の拡張
まちづくりマネジメント基本計画の思想をさらに強化すべく、市民に受けとめられている象徴的な場『まちの大広間』を拡張。

掛け合わせ

理念の踏襲

新たな時代への対応
現在の課題や将来の社会情勢の変化・要請に対応すべく、未来をも見据えた柔軟性・可変性。

掛け合わせ

新庁舎の在り方のコンセプト

市民の暮らしを守りぬく
『一町一間』

『一町一間』が創り出す 熊本市の強く、安全で、豊かな暮らしと未来

～「加藤清正のまちづくり」と「まちの大広間の拡張」と「未来」と～



図1-1:『一町一間』がまちの核となり、周辺と一体の賑わいが生まれる熊本市の未来

目指すべき新庁舎の在り方に関する考え方

01 防災拠点の「本丸」を構築

いつもの居場所がもしもの居場所に。ノンダウン防災庁舎として、あらゆる災害に対応する庁舎を実現

02 市民の利便性・高品質な行政サービスを生み出す

自由なアクセス、多様な働き方を創出する空間が可変性を持ってつながり、多様なニーズに対応

03 賑わいをつなぐまちづくりの拠点

新庁舎は熊本のシンボル『まちの大広間』を拡張する一体の空間としてデザインし、まちの賑わいを創出

【テーマ2】 あらゆる災害に対応できる庁舎

「一町一寺」の思想を継承した防災拠点の「本丸」を構築

「いつも」の場所が「もしも」の場所に。庁舎の低層部に集約された避難エリアとなる空間は、災害時に刻一刻と変わる状況に合わせて機能転換します。さらに、サクラマチクマモトや花畑広場と連携し、防災機能を保管することで、エリア防災機能を高め、あらゆる災害に対応します。

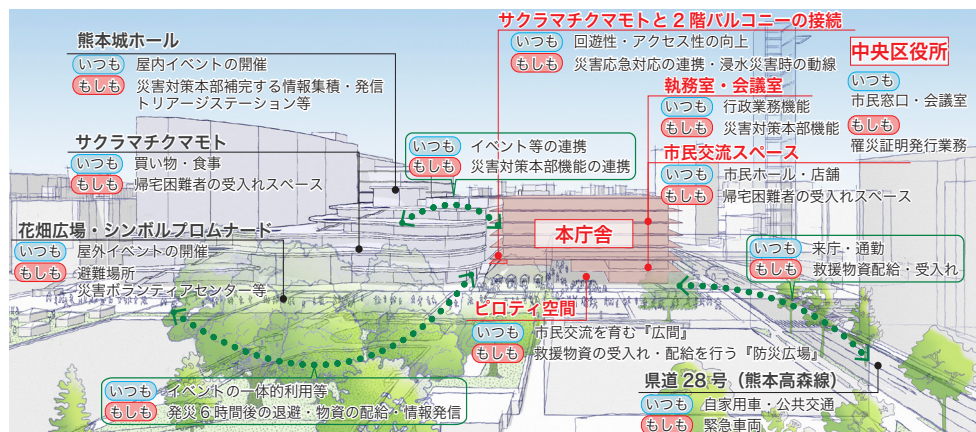


図2-1:地域全体でのエリア防災機能転換イメージ

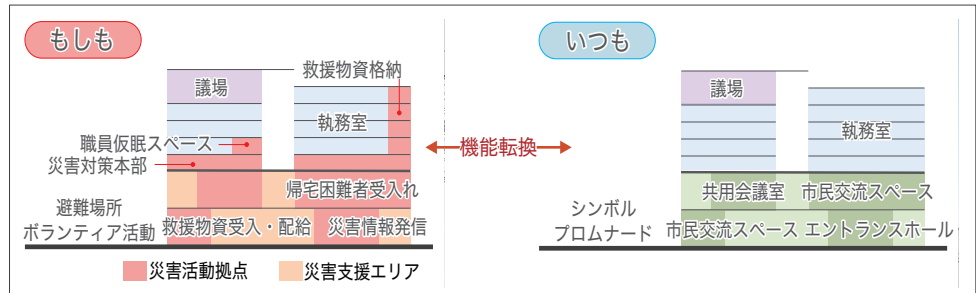


図2-2:フェーズフリー庁舎の機能転換イメージ

【テーマ3】 市民が利用しやすく、質の高い行政サービスが提供できる庁舎

『一町一間』は市民の利便性と高品質な行政サービスをも生み出す空間

市民が交流・憩う場は気軽に立ち寄れる低層部に集約し、周囲からの自由なアクセスを可能とすることで誰もが利用しやすい環境を提供します。職員が働く場は中・高層部の階層ゾーニングにより多様な働き方を実現します。

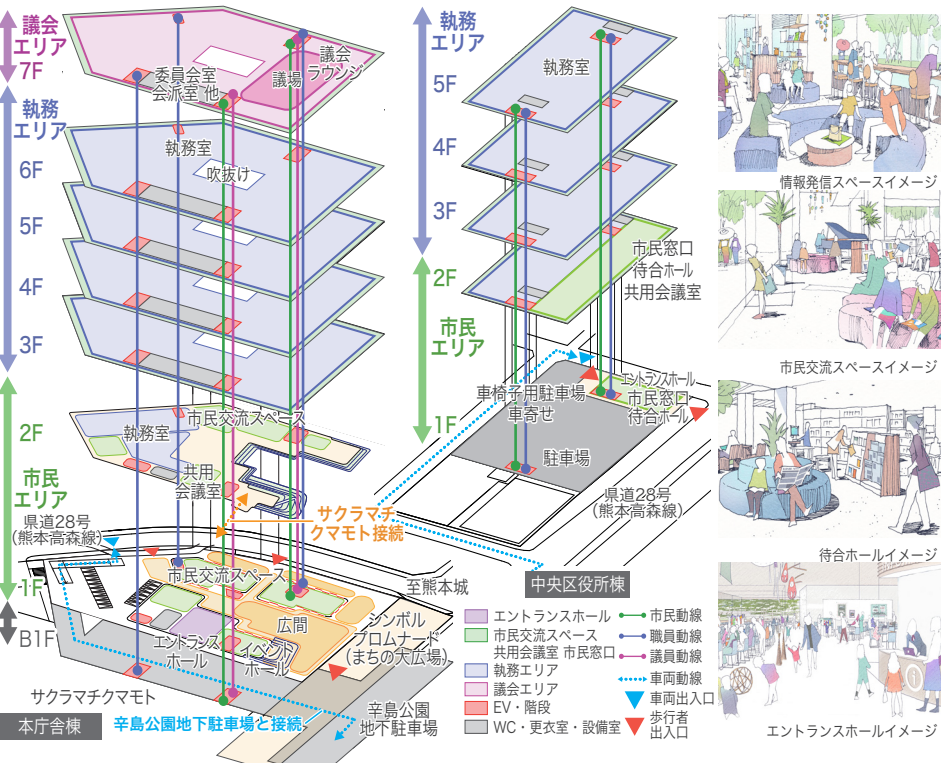


図3-1:本庁舎・中央区役所 ゾーニングイメージ

【テーマ4】 まちの賑わいに貢献し、まちづくりの核となる庁舎

『一町一間』がまちの賑わいを創出し、まちづくりの核となる

エリア全体のコンセプト「熊本城と連続し『まちの大広間』」の考え方を踏襲し、庁舎の低層部に様々な活動に対応できる柔軟性・可変性のある『むすびの間』を計画することで、エリアとの連携を強化し、まちの賑わいと回遊性の創出に寄与するまちづくりの核をつくります。

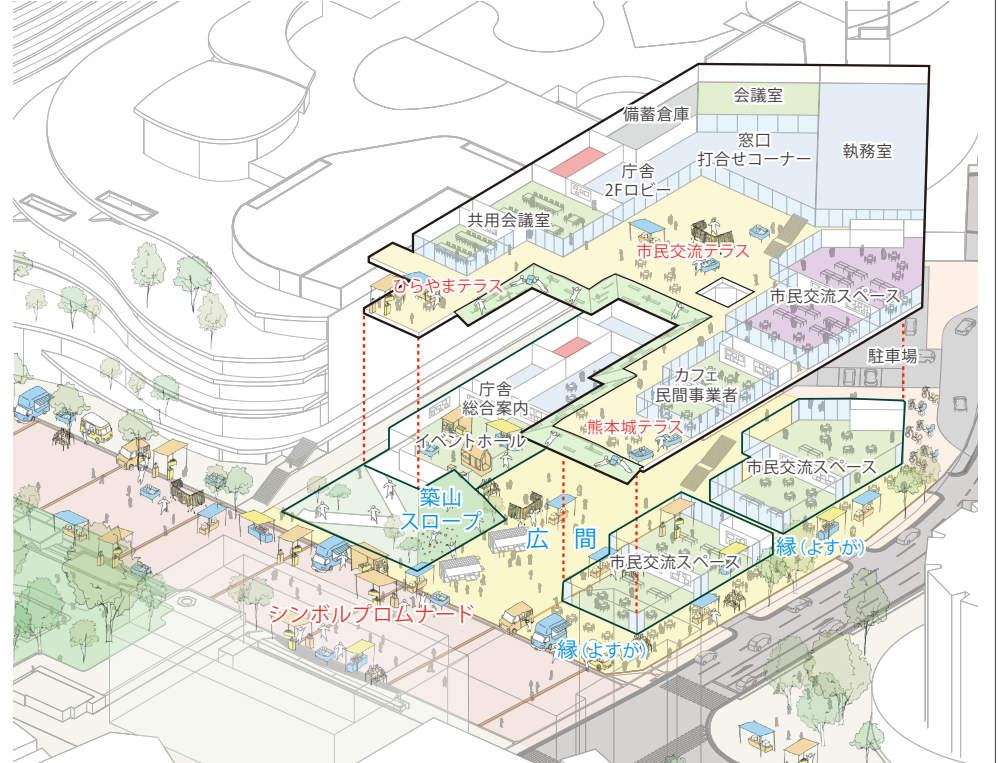


図4-3:様々な市民の居場所をつくる『むすびの間』イメージ

【テーマ5】 新庁舎整備に向けたコストマネジメントの考え方

将来を見越した確実なコストマネジメントで付加価値のある庁舎づくりを実践

昨今の物価上昇の中で、安全性や市民要望を最大化して、付加価値を生み出すため、コストプランナーと設計者が常に連携し、コストと設計内容を把握します。投資価値の高い部分を明確化し、費用対効果が高いコストマネジメントをチーム一丸で行います。

● 昨今の著しい物価高騰へのイニシャルコスト削減対策、ランニングコスト削減対策として6つの方針を提案します。

方針①: 市場動向と特殊要因から必要コストを把握。

方針②: 極力建物を低層かつコンパクトに計画し建物全体の床面積を縮小。

方針③: 経済性に優れた合理的な構造計画によって、標準的な庁舎で建築工事費の約40～50%を占める土工事と躯体工事費を縮減。

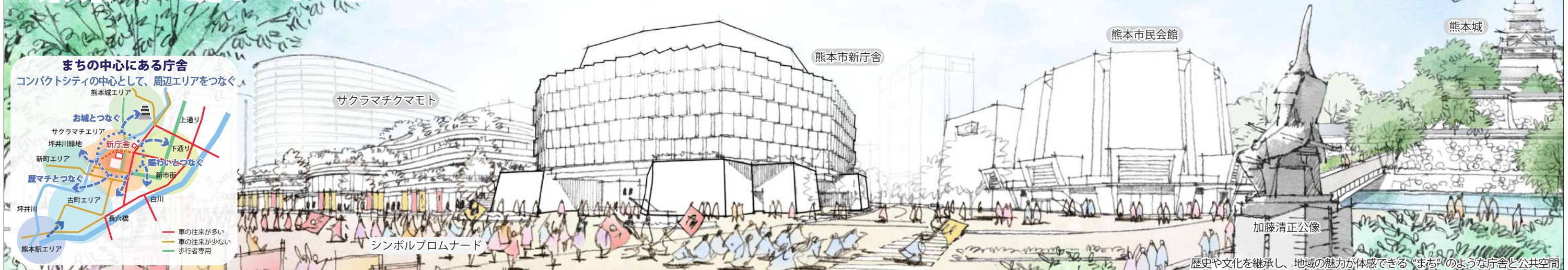
方針④: 職人不足が深刻化する情勢の中、施工効率・工期短縮を図る施工性の高い工法を採用。

方針⑤: 100年先を見据えた長寿命庁舎としてLCC(ライフサイクルコスト)に対する

各工法の比較検討により最適な工法を選定。

方針⑥: 管理運営を見据え、ランニングコストを縮減。

未来の“礎^{いしづえ}(石垣)”をつくりだす — 歴史と今が共存する新しい熊本市庁舎 —



熊本ならではの庁舎の姿とは、**歴史や文化を継承しつつ、市民交流の場とデジタル情報が融合する“今までにない新しい場”**に人々が集まり、**地域の魅力が体感できる**ことだと考えます。

城下町である熊本市街は、領域性をもちながらコンパクトで賑わいあるまちを形成しています。私たちは、そのまちの中心に、市民が日常的に訪れる**広場＝『フォーラム』**を設け、ここで展開される主体的な活動が熊本の更なる活力を生み出していく**“まち”となる庁舎**を提案します。

『フォーラム』には、防災・まちづくり・観光・産業・市民協働といった**テーマ別の“活動の場”**とともに、**市民活動が自律的に継続する“仕組み”**を、熊本市民と共につくります。

また、熊本城（石垣）から桜町・花畑地区に至る一帯の『**多様性と全体性**』を調和させる**庁舎**は、市民や観光客、訪日外国人に熊本の魅力を伝える象徴となり、庁舎が都市の中で熊本城と共に確固たる存在感を放つ場となります。

このような**庁舎づくり**を**まちづくりの原点**と位置づけ、**熊本の未来の礎**として災害に強く、地域文化を育みながら新しい**市民価値**と**活気**を生み出す**拠点**を計画します。

【“熊本ならではの庁舎づくり”で重視する方針】

1 防災拠点の庁舎

堅牢な外郭

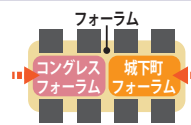
熊本城のアイデンティティである石垣
(外郭)が活動の場を守り支える



2 まちに開かれた庁舎

熊本の魅力が集まる『フォーラム』

人々が集まり、議論し、発信して、新しい文化を生み出す拠点



3 知的生産性を高める庁舎

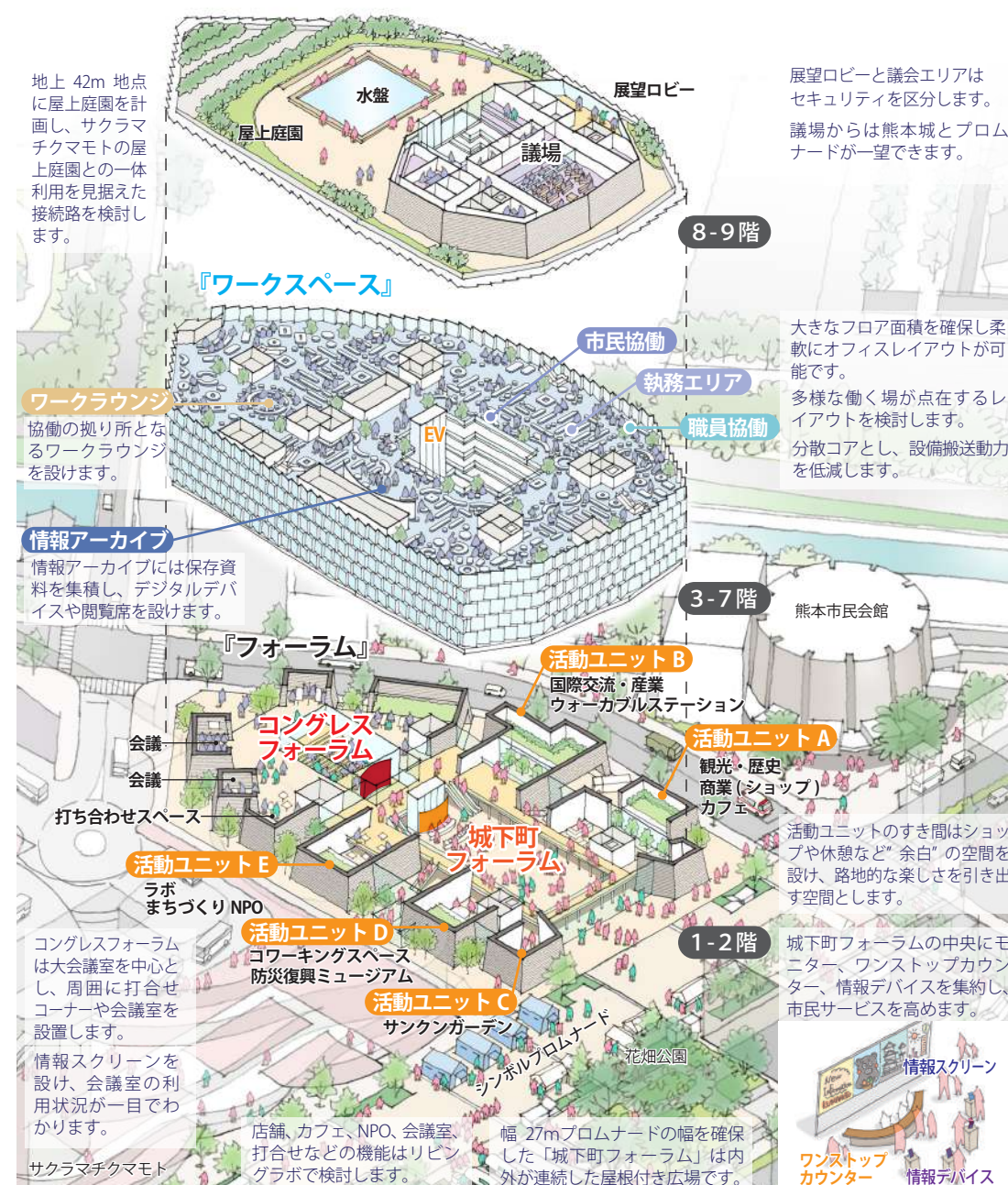
自発的な活動を生み出す『ワークスペース』

時代の変化に対応した『人・情報・活動』
が融合するフレキシブルなワークスペース



“熊本ならではの庁舎づくり”で重視する方針

【市民が行き交い、集い、情報が生まれる新しい庁舎】



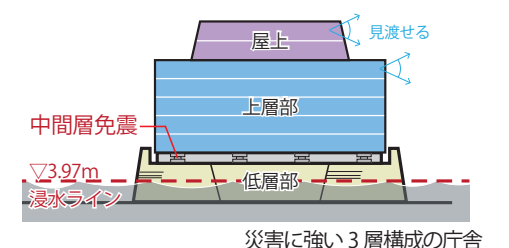
人と情報と活動が融合する庁舎のイメージ

【“熊本ならではの庁舎づくり”を実現するコンセプト】

1. 市民交流と守りの“礎(石垣)”となる庁舎

・都市の歴史と文化の継承…伝統と革新の象徴である熊本城の思想を取り入れ、伝統的な強さと現代的な柔軟性が融合した庁舎をつくります。「石垣」に囲まれ開かれた低層部は、人々が集い、市民活動や情報を育む場とします。

- ・ **防災と再生の象徴…「石垣」の構成による地震や水害等への安全性、開かれた市民のシェルターとなるフェーズフリーな交流の場が、地域の安心感を高めます。**

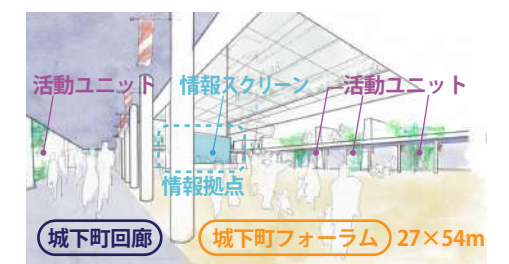


2. まちを育み、活力を生み出し、“まち”をつなぐ庁舎

- ・活動と情報を集約…プロムナードと連続する「城下町フォーラム」は、あらゆる市民活動と情報が集約され、一望することができる“まち”となる場です。

・**新しい文化を発信**…活動を支援する仕組みづくり（リビングラボ※の立上げ・運用）を行い、活動の持続性を高めます。この場で育まれる新しい文化がまちに発信され、庁舎がまちに浸透していく、“まちのための庁舎”を実現します。

※リビングラボ：市民、企業、行政が協働して社会課題の解決や新しい価値の創造を行う方法



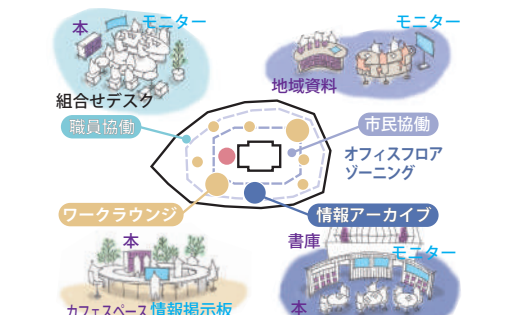
熊本のすべての魅力が集まる城下町フォーラム

3.『人・情報・環境』が融合し、自発的な活動を生み出す庁舎

- ・ **オープンで柔軟なワークスペース**…フレキシブルなオープンスペースに「活動と情報の拠点」が点在する、柔軟な ABW※を実現できるワークスペースとします。

・ **ウェルネスオフィスの実現**…「人・情報・環境」が連携するワークスペースにより、コミュニケーションを促し、知的生産性を高めます。

※ABW：業務内容に応じて働く場所を選択する働き方



人と情報と活動が合うワークスペースイメージ